
僕は魔法使い。だけど留学！？いや、だからなのか？

ハヤブサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は魔法使い。だけど留学！？いや、だからなのか？

【Nコード】

N7158U

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

魔法使いシリーズ第六弾！

今回はなんと留学！？

魔都市香港に留学した忍達に待ち受けていたのは新たな友人と戦士。だが、その背後に蠢く影。

それに関連しているのは、忍の父親！？

作者も展開に翻弄される生きた作品！第六弾！

久しぶりの呼び出し

夜、久々に呼び出されて僕はシオンと共に高校に向かった。僕らはすでに大学生になっていた。

我が息子も2歳だ。愛おしくて仕方ない。

きっと、立派な子に育ってくれるだろう。

ん・・・これを親バカというのか？

高校の言われた部屋に行く。

「お、剛。立花さん。」僕は部屋の中で剛達がすでにいるのを発見した。

「よお、忍、シオンちゃん。」彼は笑った。

「今回、何で呼ばれたと思う？」僕が訊くと、彼は肩をすくめた。

「邪神がらみじゃなきゃいいが。」

「そうだな。」その声に振り返ると藤君が立っていた。

「前回、出番がなかったからな。元気か？忍。」

「ああ。」僕は彼と握手した。

「ま、邪神の可能性は低いと思うよ。」

次の声にまたもや振り返ると、今度は窓から兄さんとハーリアさんが入ってきた。

「何でそう思うんですか？」立花さんが訊いた。

「どうせ、光一族特有の『勘』でしょ？」

次の声は振り返らずとも分かった。阿部だ。

「あったりー。朱雀のお嬢さん、よく分かったね。」兄さんは笑った。

阿部はため息をついて剣を抜いた。

黙って彼女は剣の柄頭を捻った。

眩い光を放つと、剣のあった場所に聖斗が立っていた。

「よっ。」彼は手を振って座った。

「おー、みんな、勢揃いだな。」コウヘイがどこからともなく現れ

た。

「あれ？実家に帰ったんじゃないんですか？」

僕は手紙の内容を思いだして言った。

何事もなかった間、彼から一通の手紙を貰っていた。

『奈良の実家に帰っている。何か特産物欲しい？』と簡潔に書いた、コウヘイらしいものだった。僕らは奈良漬けをお願いした。

「呼び出された。あ、これ、奈良漬けね。」あ、今渡すんだ。

僕は受け取って仕舞うと、椅子に座った。

と、突然、ドスンと音がした。

「あー、勢いが良すぎた。すまん。」そう言ったのは人間体の白虎だった。

「え？何で白虎が？」藤君が言うと、

「麒麟からの言伝だ。」彼はそう言うと、咳払いした。

「中国の方に魔法大学がある。最近、音沙汰無かったが、校長が手紙を寄越してきた。大学に何か陰謀が渦巻いている。誰か切れ者を送って調べてくれないか？と。」

「ほー。迷惑だな。」コウヘイは唸った。

「音沙汰無かったのにいきなり来たのは救援要請。都合のいい話だな。」

「てか、自分らのことは自分らで調べればいいのに。」剛は言った。

「おい。」僕は言った。

「校内の連中は教員のことを警戒するに決まっているだろ？」

「あ、そうか。」

「それでだ。」白虎は話を戻した。

「都合のいい時だけ頼ってなめているのか？と一喝する手紙を麒麟は送ったんだが・・・。」

そこで彼は口ごもった。藤君が頷いて先を促した。

「・・・校長が何者かに暗殺された。」

ピクツと兄さんの指が動いた。

「それは、陰謀によってか？」兄さんは言った。

「恐らく。校長の遺書より、校長は麒麟が選抜することになった。そして、その任務に赴任したのが中野だ。」

「中野先生？」阿部は信じられないように言った。

「いかにも。」白虎は頷いた。

「今、麒麟が校長の蘇生を試みているが、うまく行かん。どうやら、禁術か邪術の類で殺されたようだ。そこで、お前らを出すことにした。」

「なるほど。」藤君は言った。

「禁術や邪術となれば、邪神の可能性も出てきますからね。」

「という訳で、明日、早速、出て頂きたい。」

「え？明日？学校はどうするんですか？」

白虎の突然の発言に戸惑いながら僕は言った。

「分身に決まっているじゃないの。」阿部は言った。

「え？」

「貴方、もしかして知らなかったの？」阿部はおかしそうに言った。

「私達が長期にわたって留守にしていた時、麒麟様の分身が授業などを受けていたのよ。」

「へ、へえ。」知らなかった・・・。

「さ、支度を急いだ。明日の朝には出るぞ。」

僕とシオンは家に帰ると、隣の牧人達に預けていた息子、正樹を引き取りに行った。

「やあ、忍。何があったの？」牧人は正樹をシオンに渡しながら言った。

「それは後で話す。」僕が言うと、彼は頷いた。

家に帰宅すると、正樹をソファアに座らせた。

「お父さん、どーしたの？」2歳なのに言語を話せるとは・・・。
これも魔法使いの血のせいかな。

「お父さん達はね、悪い人たちをやっつけに行くの。暫くは牧人おじさんの所にいて貰っていいかな？」

僕はゆっくりと話した。

正樹は目をパチクリさせると頷いた。

「うん。頑張ってね。」

なかなか良い子だ。

よしよし、と頭を撫でてやると、正樹の目がトロンとなった。

「じゃあ、おねえねしようか。」僕は彼を布団に運んでやった。

「おやすみなさ・・・い・・・。」

彼はそう言くと、すぐに眠った。

将来、利口な子に育つよな。きっと。

「忍、ご飯が出来たわ。」シオンは台所で言った。

「お、サンキュー。」僕は居間の席に腰を下ろした。

彼女はスープとご飯を持ってきて、居間のテーブルに置いた。

「ふう、また、行くんだな。」箸を取りながら、僕は言った。

「ええ、今回は一緒に戦えるわね。」彼女は目をキラキラさせて言った。

「戦い足りないのか？」

「ええ、もちろん！」

彼女の粋がりように僕はおかしくなってクスクス笑った。

「ただ・・・正樹が心配ね。」ふと、彼女は顔を曇らせた。

「ああ・・・そうだな。でも牧人ならうまく育ててくれるよ。」

僕は心に不安を抱きながらも明るく言った。

「今回は、いつ、帰れるかしら。」

彼女の問いに思わず箸が止まった。

「もしかしたら、一年以上、かかるかもな。最低の事態なら・・・。」

僕は口ごもった。あまり、考えたくない概念があった。

「あまり、考えないようにしましょうか。早く帰れるように頑張ってください。」

シオンは僕を氣遣って明るく言った。

「ありがと。このスープ、美味しいね。」

「ええ、卵スープにオニオンシロップを入れたの。」彼女は嬉しそうに言った。

他愛もない話。

これが当分できないかも知れない・・・。

僕はそんなことを思いながら、食べ、話した。

僕とシオンは正樹を抱きかかえると、再び牧人を訪れた。

「やあ。」彼は招き入れると、お茶をサッと出した。

「今回の任務は？」

「はつきり言うと、長期戦になるかも知れないものだ。」

僕はそう前置きすると、白虎に言われたことを簡潔に要約して話した。

「ふうむ・・・。確かに厄介だ。その間、正樹君を預かって欲しい・・・ってとこか。」

「ああ。」

「かわいそうに。」小喬さんは正樹を僕の腕から取り上げて言った。「任務だから仕方ないけど、親と子供は別れるべきじゃないのよ。」

「分かっている。だから、出来るだけ早く終わらせる。」

僕が言うと、牧人は信じている、と言う風に頷いた。

「頑張ってね。」小喬さんはそう言うと、正樹を子供用ベッドに寝かせた。

「正樹、行ってくる。」僕は囁くと、彼の髪を撫でた。

「行ってきます。正樹。」シオンは涙ぐんで言った。

グッと顔を引き締めると、僕は言った。

「じゃあ、頼んだよ。」

「ああ、任せておけ。」

牧人は言った。小喬さんも頷いた。

僕は自分らの部屋に入ると、荷造りを始めた。

保存食、剣を研ぐ道具、煙札や爆弾札、魔法薬調合道具、巻物など。あと、迷ったが邪神から貰った杖もしまった。何か役に立つかも知れない。

それらをバッグに詰め込むと、バッグがパンパンになった。

「シオン、来いよ。」僕は支度をしているシオンに声をかけた。

「剣を磨いてやるからよ。」

「うん。」彼女は嬉しそうな顔で僕の所に来ると、手首を捻って剣に戻った。

さすがに普通の暮らしだから傷はあまりないが、任務前だ。しっかりと研磨してやる。

最後に亜麻仁油を塗ると、軽く振ってみた。風を裂く良い感触。これでなくちゃ。

青龍眼やいろいろな手段で刀身を守る魔法が弱まっていないかチェックすると彼女を人間に戻した。

「ん、ありがと。」シオンは嬉しそうに言った。

「ヤケに嬉しそうだな。」

「だって、磨いて貰うの、久しぶりなんだもん。」

「そうか、そうか。」僕は彼女の頭を撫でた。

彼女は気持ちよさそうに目を閉じた。

「・・・さて、行くか。」「うん。」

僕はバッグを背負うと、ベランダに出て召喚術を使った。

「殿、今日はどちらまで？」ライガーが現れるなり言った。

「高校だ。」僕は短く伝えたと彼の背に乗った。シオンも背に引き上げる。

「分かりました。」ライガーは翼を開いた。

「幻術、《純粹透明》。」僕は術を唱えて姿を消した。

透明になった僕は飛び立った。

もうすでに東の空で朝日が昇ろうという兆しが見えていた。

飛行中の語らい

「お、着いたな。」コウヘイは言った。

「えー、これなんですか？」

僕は開いた口がふさがらない。

「やー、普通にド・ラゴーンですよ。」

僕の目の前にあったのは巨竜だった。火影竜の三倍はあろうか。

「コウヘイ、準備が出来ました。」見覚えのある女性が下りてきた。

「ありがとう。夜々。」

コウヘイは言うど、ド・ラゴーンによじ登った。

「いやあ、白虎さんに頼まれちゃってね。」彼は言う。

「・・・コウヘイさん、どれくらい従者がいるんですか？」

僕はほとほと呆れて言った。

「ん？怪物を含めても十だよ。」

えっと・・・タケシにゴロー、夜々さんにド・ラゴーン・・・あと、男が一人ずつ。

「あの、御門さんと御子神さん、お姉さんは数には含めていませんよね？」

僕は念のために確認した。

「ああ、後、夜々も含めていないぞ。」

「え？夜々さんも？」僕は驚いた。

「ああ、妻に当たるからな。」

えー、じゃあ、あと6人も従者がいるのか・・・。

「てか、妻なんですか！？」僕は遅れて気付いた。

「ああ、さっ、無駄話はそんな物だ。みんな来たぞ。」

いつの間にか全員集結していた。

「コウヘイ、知っていると思うが。」兄さんが言った。

「お前の従者の召喚はあっちじゃ使えんからな。」

「え？召喚術が使えないの？」僕は驚いて尋ねた。

「いや、召喚自体は可能だ。」兄さんは言った。

「だが、此奴の得意な磁場型召喚術は不可。日本でしか出来ん。」

「分かっているって。」コウヘイは言った。

「え？召喚術って種類なんてあったっけ。それにチベットの時は？」
僕が訊くと、兄さんはため息をついた。

「質問が多いな。こいつに乗ってから話すぞ。」

僕らはド・ラゴーンに乗った。彼は唸るとビュンと飛翔した。

ド・ラゴーンが安定するとコウヘイは術をいくつか唱えて結界を張った。

「さて、説明に答えるとするか。」兄さんは堅い鱗に腰を落ち着けて言った。

「召喚術は時空間型と磁場型がある。時空間型はいつでもどこでもお手軽にだ。しかし、召喚者と被召喚者、互いの理解度が高くないと難しい術。それで契約が考案された。」

ここまではいいか？と兄さんは指を突き出した。僕は頷く。

「磁場型は磁場から召喚する。磁場の流れに頼った物だ。」

僕はポカンと口を開いていると、兄さんは図を書いた。

「磁場にはある一定のリズムがある。」

兄さんはうねうねと曲線を書いた。

「ここに人間、魔法使い、魔物の気配は確固たる存在としてある。」
それを横断する形で一本の線を引いた。どうやら、それが魔法使いの存在らしい。

「この存在をリズムの中から引っ張り出し、その場に置く。」

兄さんはそこまで言うのと、ため息をついた。

「この論理が分かる奴はあまりいねえ。てか、理解できた奴は出来る。」

あ、そう。

「僕は全く理解できなかった。」僕は言った。

「同じく。」剛は頷いた。

「ま、大事なのは、この術は特有の磁場がある日本でしか使えない。たった一つの例を除いて。」

「たった一つ？」僕は訊いた。

「ああ、強力な魔法が近くで渦巻いているときだ。その時だけ日本の条件と類似する。」

「へえ……。」僕は頷いた。

「まあ、そのことを分かっているから夜々を連れてきたんだが。」
コウヘイが言うと、夜々さんが嬉しそうに微笑んだ。

「ま、こんな従者や嫁が出来るのも共感能力のおかげだな。」
兄さんは肩をすくめた。そして、剣を磨き始めた。

「前から思っていたんですけど、共感能力って何ですか？」

藤君が口を挟んだ。

「たまたま手にしてしまった能力さ。その経緯は後々話そうか。」
コウヘイはそう言うと、説明を始めた。

「共感能力は相手の感情などを理解できる。それだけじゃない。技、技術をコピーできる。それで炎、水、土、風、雷、幻、体、封印、召喚と言った粗方の術を覚えた。しかし、逆から言えば、封魔をされたらお終いということだな。」

「え？でも瞬間移動出来るじゃないですか。」僕は言った。

「いや、あの力はこの前、忍君から外道魔術書を借りたときに消した。」

「ほー、なるほど……。」僕は頷いた。内心残念だった。

ちなみに、僕はレバーの遺した外道魔術書で各地の呪われた血の呪縛から解放していった。

苦勞したが、九割方、解放できた。

「さて、質問は終わりのようだね。」コウヘイは言うのと寝っ転がった。

「寝させて貰うよ。」

そう言った三秒後には寢息が聞こえてきた。

僕は銘々のことをして暇を潰していると、ド・ラゴンは下降を始めた。

「おや、もうすぐ着くようだ。」コウヘイがいつの間にか起きて言った。

「どこですか？場所は。」阿部が問うと彼はニヤツと笑った。

「魔都市、香港さ。」

チャイナ魔法学校

香港の山に着地すると、兄さんが先導して移動を開始した。

「山の何処かにあるの？」僕が問うと、

「いや、そんな分かりやすい所にあつたら普通の人間に見つかってしまう。」

兄さんはそう言うのと、木々をどかした。

「ここかな？」彼が導いたのは大木の前だった。

「お、扉があつた。ここを通って行くんだな。」

彼は独り言を言いながら木の中に入っていた。

僕らも続く。

山の中じゃないということは・・・？

中では大きな通路があつた。

「この先にあるぞ。」兄さんは嬉しそうに言った。

「しかし、遠いなあ。」藤君は言った。

「なあに。これしきのこと。」コウヘイは言うのと、印を結んだ。

「夜々も頼む。」「はい。」

二人は術を唱えた。

「幻術、《鳥獣変化》！」

「ほう、獣に姿を変えて走るか。考えたな。」兄さんは言った。

彼らは見る間に鹿へと変化していった。

「一人ずつは乗せられる。」鹿になったコウヘイは言った。

「理恵、乗って。」剛は言った。

立花さんは頷くと、夜々さんの鹿に乗った。

「じゃあ、阿部。」僕は言った。

「私なら大丈夫よ。それよりシオンちゃんやハーリアさんの方が。」

阿部は笑って言った。

「シオンは僕が剣にして連れて行くし。」僕は言った。

「私はヴァンパイアですもの。」ハーリアさんは微笑んで言った。

「・・・じゃ、お言葉に甘えて。」

阿部はそう言うと、コウヘイの鹿に乗った。

「よし、じゃあ、行くか。」

兄さんは言うと、駆け出した。皆も続く。

僕はシオンを剣にすると走り出した。

しかし、遠い。2, 3キロはあるんじゃないか？

ダッダッダッと皆で地を踏みながら思った。

「兄さん。」僕は兄さんに近寄った。

「何だ？」兄さんは駆けるスピードを緩めずに言った。

「もしかしたら、幻術じゃないの？」

「え？幻術？普通、友好で来た者を拒むか？」

「や、有り得る。」藤君は駆けながら言った。

「魔法学校ならば、魔法力を試すのは道理なのでは？」

兄さんは考え込んでいたが、手を挙げて皆を止めた。

「幻術、解！」

ガタンツと音がして足下が無くなった。

落とし穴！？

僕らは悲鳴をあげながら落ちていった。

ドスンッ！

クッションの上に着地した。

「Welcome! ようこそ、チャイナ魔法学校へ！」

パンパンパンというクラッカーの音と共に声がした。

僕らが起きあがると在校生の人たちは拍手して招き入れた。

「ようこそいらっしやいました。私はこの学校の教頭をやっていますラーマジと言います。」男が現れて自己紹介した。

「何しろ、ジャパンからの留学生は初めてでして。ジャパンの人たちの才能がどれほどが知りたくて通路に幻術を張らせて頂きました。御無礼をお許し下さい。」

僕らは啞然としていると、在校生の人たちが宿です、と案内してく

れた。

「こんにちは。美緒と言います。」僕を案内している女の子は言った。

チャイナ服を身に纏った愛らしい茶髪のツインテールだ。だけど・・・。

「何で、ポニーテールじゃないのかなあ？」

「え？何ですか？」美緒ちゃんは不思議そうに首を傾げた。

「いや、何でもない。」

（ちょっと、他の女に手を出さないでよ！）シオンは声を発した。（そんなことしなくてもいい女がいるじゃん。）

僕が言うと、彼女は黙り込んだ。きっと刀身が真っ赤なんだろう。

ルームメイト、美緒

「こちらにどうぞ。」

僕は美緒ちゃんに一室に案内された。

部屋の右側にベッドが置かれている。その下には箆笥と勉強机。左側には同じ物が置かれている。

唯一違うのは、そこに使用者の私物があることだろうか。

「これから相部屋ですね。」美緒ちゃんは言った。

「え？普通、男女って分けるべきじゃない？」僕は驚いて言った。

「んー、それはジャパンの変な風習ですか？」

彼女は首を傾げて言った。

「私達の間では男女共同で暮らし、そつなく接触が図れるようにするというのが第一です。」

「ははあ、なるほど。」僕は頷いた。

（てか、納得しないでよ！他の女と相部屋ってイヤよ！）シオンは言った。

（仕方ないだろうが。ここの国の風習だ。）僕は心の中で言葉を返した。

「じゃあ、改めて自己紹介と行きましようか。私は美緒。姓は播です。呼び捨てで構いません。術は陣型で炎と水、幻術を用います。」美緒（早速呼び捨てで考える。）は淀みなく言った。

「僕は忍。姓は光。僕も呼び捨てで大丈夫。術は陣型で風と幻術を使う。他も使えるけどあまり得意じゃないな。」

僕も自己紹介をした。

シオンが何かとうるさいので、実体化させた。

「こっちはシオン。僕の妻に当たる。」僕は紹介した。

「よろしく。」シオンは硬い笑顔で礼をした。

最初は驚いていた美緒も納得したように頷いて言った。

「よろしく願います。」

彼女は次に書物を取りだした。

「これが時間割ですね。これで授業を受けます。」

「へえ。」僕は明日のページを開いた。

『実習』

「・・・何？この実習って。」僕は美緒に訊いた。

「チームメイトとタッグを組んで戦うんです。それでクラスや成績が決まります。」

彼女はそこまで言うと、あっと息を呑んだ。

「そうでした！実習の準備を始めないと！」

美緒はグランドに早く出ましようと言った。僕を急かした。

僕はシオンを剣に戻すと、グランドに出た。

グランドに出ると美緒は武器を広げた。

「何それ？大砲？」僕は率直なことを言った。

彼女は筒状の大きなものだった。身の丈ぐらいあろうか。

彼女は僕をチラッと見ると、説明をした。

「レールガンって知ってます？ジャパンネームだと超電磁砲って所でしょう。」

「超電磁砲！？」僕は眉をひそめた。

確か、禁術目録の下巻にSSランクの禁術として乗っていたはずだ。

「禁術ですが、武器に改良すれば何ら問題はありません。」

彼女はそう言うと、肩に担いだ。

「私は印を結ぶのが遅いのでこれを用いているのです。」

次の瞬間、ドウツと水の塊が飛んでいった。

「ね？」

僕は頷いた。良い戦力になりそうだ。

「で、そのレールガンの仕組みって？」

「このタイプのレールガンは巻物で出来ています。」

そう言うと、彼女はレールガンを地面に置いて術を唱えた。

「レールガン、展開！」

なるほど、確かに巻物だ。

筒が開けると内部は紙が貼られていた。

何カ所に術らしき文が書かれている。

「何か、術頂けます？日本の幻術あたりを。」

突然言われて僕は戸惑ったが、頷いて印を結んだ。

「幻術、《陰陽道結界》！」

「レールガン、記憶せよ！」

美緒は同時に叫んだ。

術がレールガンの中に吸い込まれていった。

そして、文字が浮き出てきた。

「これで今の術は記録されました。」彼女は頷いて術を唱えた。

「レールガン、武器化！」

レールガンはシュルツとまとまって大砲に戻った。

「必要な時にこれで撃てます。えっと・・・説明としてはこれでいいですか？」

彼女の言葉に僕は頷いた。そして言う。

「タッグともなればコンボが大事だね。考えないと。」

「やっぱり、風ならば炎ですかね？」彼女は首を傾げた。

「いや。」僕は否定した。

「読まれやすいコンボはダメだ。改良しやすい意外性な物がいい。」

「そんなのありますか？」美緒は再度、首を傾げた。

「そうだな。炎と水と風。全部合わせてしまうって言うのは？」

「えー、打ち消してしまいますね。」彼女は笑って言った。

「だが、水が油だとしたら？」僕は意味ありげに微笑んだ。

「なるほど。それで行きましようか。」

美緒は力強く頷いた。

魔法戦闘実習

「ハイ、集まりましたね。」神経質そうな先生が壇上に立った。僕たち生徒は皆、体験室に集まっている。パートナーと一緒に。体験室は何故か森林である。地形を生かせと言うことか。

「これから、魔法戦闘実習を行います。では、最初に……。」最初の組が呼び出され、戦闘が始まった。

（もしもし？聞こえますか？）美緒の声が突然頭の中で響いた。

（え？どうしたの？）僕は戸惑いながら交信した。

（ごめんなさい。忍と直接話したらネタがばれて負けるかも知れないから。）

（大丈夫だよ。）僕は安心させるように言った。

しかし、内心かなり怖いのだ。

この学生がどのくらい出来るか分からない。

かなりハイレベルな学校と聞いているので余計にだ。

さらに目の前で繰り広げられているのは魔法論理を駆使した戦術。

実技しかやってきていない僕に比べたら格段、知識はあるのだろう。

「雷陣、《幾何学電磁模様》！」

突然の叫び声に顔を上げると幾何学的模様の電気の網が男女を絡め取っていた。

「ギ、ギブ！！ギブアップ！！！」男は叫んだ。

わっと一斉に歓声が上がる。

「次。播と光、田中とブラウン。」先生は言った。

僕と美緒が前に出ると光景が変わった。

「幻術ですよ。」狼狽える僕に彼女は囁いた。

あ、そうか。

場面は体育館のようだ。

上空が果てしなく広い。

「始めッ！」

僕はその声に反応して動いた。

（僕が陽動で。）（分かりました。）

短い心の中の交信。

僕は駆け出すと、金髪の女が出てきた。

「女はあまり斬りたくないんだがな。」一瞬のうちに僕は呟いた。

「後悔するわよ。」同時に女は言った。

その瞬間には居合い切りを放っていた。

ガッ！

鈍い音を立ててシオンは女の腕に装着されていた盾に突き刺さった。

「へえ、切れ目を入れたのは貴方が初めてよ。」

女はそう言うのと、掌と指を突き合わせた。

まずっ！術使いか！僕はシオンを抜いて飛び退こうとした。

「炎術、《溶岩流》！」女の方が早かった。

彼女の口から溶岩流がゼロ距離で放たれた。

ドウッ！

水の塊が彼女の口に命中した。

今だ！僕はシオンが盾に突き刺さったまま印を結んで術を行使した。

「風陣、《青龍覇》！」

シオンから青龍の覇気が飛び出て女を吹き飛ばした。

うまく盾からも刃が抜ける。

（サンキュー、美緒。助かった。）僕は冷や汗をかきながら言った。

（いえいえ。）美緒は嬉しそうに言う。

レールガンで水の波動を撃ち込んでくれたらしい。

その外傷で女は口にあざを作っていたが、見る間に消えていく。

（あの男、癒し手だわ。）美緒は言った。

確かにそうだ。後方にいた男は集中している。

（忍、やりましょう。）彼女は言った。

（おう。）

「水陣、《魔油波動》！」もたもたと印を結ぶ気配と共に術が後ろから来た。

僕は高く跳躍すると足下から油が飛んでいった。

(せーの！)

息を合わせて術を行使した。

「風陣、《螺旋波動》！」

術を唱えると同時に美緒はレールガンで撃った。

炎と螺旋が油と融合して爆発を生み出す。

「『合成術、《五右衛門煉獄》！」」

ドウツと爆発が巻き起こった。阿部とやったのより大きい。

僕の所にも蒸気や湯気が来た。

「やった！」彼女が叫ぶ声が聞こえた。

・・・何か変だ。

水を持っているあの女なら打ち消そうとするはずだ。

・・・まさか！

僕は叫びながら走った。印を結ぶ。

「美緒！逃げろ！」

「遅いわ！」

女が地面から這い出して腕を伸ばした。

グサツ！

辛うじて・・・間に合った。

「し、忍！」美緒は叫んだ。

美緒を庇った僕の胸にあの女の突き出した腕が突き刺さっていた。

「・・・良く間に合ったわね。」女は意外そうに言った。

「僕は、特別だからな。」僕は呟いた。

「名前を聞いてもいいかしら？」女は言った。

「いいぜ。」僕は頷いた。

「僕の名は・・・。」その瞬間、僕はポンツと消えた。

いや、正確には僕の分身が消えた、と言っておこうか。

「光 忍。誇り高き魔法使いだ！」

さっきの男の所で僕は立っていたのだ。男は縛ってある。

「バ、バカな！何故、そこに！」女は取り乱した。

（美緒、今だ。）

「あの蒸気の中で分身を作ったまでよ。」僕は不敵に笑った。

「バカな……。あの中で声も出さずに作り出すなんて……。」

「言っただろ？僕は、」

次の瞬間、ドン、と音が響いた。

「特別だと。」

レールガンを撃ち込まれた女は力無く倒れた。

「勝負有り！」

魔法戦闘実習（後書き）

ハヤブサです。

元気に駄作更新中です。

小説が勝手に一人歩きするケースが続出。

いや、軌道修正が大変ですねー。

ちなみに、第六弾の執筆を終え、七弾にもう入っています。

こりゃ、止まりそうにありませんww

忍君、子供が出来たんだからもう少し大人しくしようよ。

感想、お待ちしております^^

兄の戦い

【火影】

「忍もやるねえ。」俺は呟いた。

「当たり前でしょう？」パートナーのハリーアは言った。

「貴方の弟ですから。」

「次！光とヴランケーヌ！ポンドとファンファン！」

「さ、行くか。」俺は言って立ち上がった。風景が洞窟に変わっていく。

「楽勝よね？」ハリーアは剣を抜きながら言った。

「いや・・・。」俺は相手を見据えて言った。

「油断はならんかもしれん。」

「始めッ！」

俺は剣を抜くと用心深く近づいていく。

相手の男女はジッと待っている。

罠か・・・？しかし罠を仕掛ける暇はないはず・・・。

「召喚術！」

男は突然印を結んで唱えた。

地面からゴゴゴツと三体の人形が現れた。

三方から俺は完璧に囲まれてしまった。

人形達は即座に結界を張って俺を縛り付けようとした。

くっ！俺は咄嗟に召喚術を唱えた。

「召喚術！」

次の瞬間、人形達は俺に向けて閃光を放った。

「フェールッ！」ハリーアの声が響く。

「大丈夫だ。問題ない。」

俺は絡繰り『青龍』を召喚していて身を守っていた。キチンと修復済みである。

「ほう、君も人形師でしたか。」男は言った。

「いかにも。」俺はそう言うと、青龍を動かした。

瞬間的に一体に噛みつき、バラバラにすると、尻尾を振るってもう一体もスクラップにした。そして逃れた人形に溶解液を吐きかけた。人形は溶けて機能しなくなった。

「やりますね。」男は言うのと、パチンツと指を弾いた。スツと一人の女が男に近寄った。

「ん？助っ人は反則じゃないか？」俺が言うと彼は指を振った。

「こいつは人形です。」

「気を付けろ。ハーリア。こいつはただ者じゃない。」

「よく分かっていますね。」彼は笑った。

その瞬間に人形は動いた。

反射的に俺は糸を引いた。

ガキンツ！

金属音がした。青龍の牙と人形の剣がぶつかっていた。

「おや、神速をかわしましたか。ならば！」

男は魔力を人形に送った。

「インストール。アラ・ナイト・ウーヴ、プログラム・A、スター・モーシヨン・フレイル・ハジエストリーム。」

人形は呪文らしき物を唱えた。

しかし、この類のものは聞き覚えがない。

もしか、西洋の・・・？

考えていた瞬間、事が起きた。

人形の手から触手が現れ、一瞬のうちに俺を縛り付けた。

いや・・・これは・・・イバラ！？

「動けまい。下手に動けば薔薇の刺で自ら肉体に花を咲かせることになるですよ。」

男は指を上げて言った。

「くっ・・・。」俺は歯噛みした。

「フェールツ！」ハーリアは叫んで飛んできたが、

「土陣、《地盤隆起》！」女が岩壁を作って進撃を防いだ。

「真祖モード！」ハリーアは叫んだ。

ドカンッ！

凄まじい音で岩壁が崩れた。ハリーアが蹴破ったのだ。

・・・おかしい。真祖のエネルギーが巨大すぎてハリーアの力が感じられん。

「まさか！」俺はあることに気付いた。

真祖・ヴァンパイアの血に意識を吞まれている！

まずいっ！俺は袖から『大審判のロザリオ』を取り出した。が、動けないのでは意味がない。

ハリーアが邪気を纏って女に近寄っていく。

「く、来るなあっ！土陣、《土石砲撃》！」女はパニックに陥っている。

「落ち着け！」男は叫んだ。

が、女は土石の塊を乱射した。

しかし、ハリーアは避けもせず、近づく。

「妖術、《吸血鬼の絶命蹴り》！」彼女は叫ぶと、消えた。

いや、信じられない速度で走っただけだ。

「ごふっ。」女は吹き飛ばされながら倒れた。

そう、ハリーアの、命を奪う蹴りが炸裂したのだ。

「や、止めなさい！！」先生が異常に気付いて走ってきた。

「妖術、《吸血鬼闘志》！」

ハリーアの術が先生までも吹き飛ばした。

「早く・・・術を解け！さもないとお前も死ぬぞ！」俺は男に叫んだ。

男は躊躇したが、人形に指示を与えた。

イバラが解けて、俺は自由になった。

俺はロザリオを構え、術を唱えた。

「封印術・・・。」

「妖術、《吸血鬼闘志》！」

が、術を唱えきる前にハーリアの術を喰らった。
くっ・・・強い・・・。

「私があの子を拘束します。その間に封印を。」男は言った。
止める！と言おうとしたが彼はすでに人形に魔力を送って指示を出
していた。

「インストール。アラ・ナイト・ウーヴ、プログラム・B、スター
ト・モーション・ラウロウト・ハジェスレイザ。」

人形はそう術を唱えると、手からイバラを出した。
そして、ハーリアを縛り付ける。

「ぬおおおおおおおおお！」彼女は身悶えしてイバラを振り
千切ろうとする。

「ヴァーヴェンダ。」人形は呟いた。
パキパキパキ。そんな音が響く。

何と、イバラが鋼鉄のように硬化していった。

「今だ。光君。」男が呟いて、俺は我に返った。

「封印術、《炎帝八卦封印、七の陣》！」

ガガガッと七本の触手が彼女の力を押さえ込んだ。

意識が朦朧としたが、俺はハーリアの額にロザリオを当てた。

「封印術・・・《屍鬼封印》。」

しっかりと邪気を収めると俺は彼女が倒れないように抱きかかえな
がら膝をついた。

「この試合は・・・棄権する。済まなかった。」

「いや、引き分けだな。あのままだったら私が負けていたかもしれ
ん。」

男は不敵に笑った。何と余裕な・・・。

「お前の人形は何だ？普通の物とは違うようだが。」俺は話題を変
えた。

「ああ、『絡繰り』でもないが『絡繰り人間』でもない。」男は荒
く息を吐いた。

「『機巧戦士・ミカン』。契約を結んだ相手としか活動しない意志

を持った存在だ。」

「申し訳ありませんでした。」ミカンは歩いてきて言った。

「ほー、そんな物があるのか。お前の名・・・は？」

「レオナルド・ポンド。お前は？」

「光 火影。」

そう言った瞬間に目の前が真っ白になった。

初めての友人

バタ・・・と兄さんが倒れたのが分かった。

「兄さんッ！」

僕は数人の生徒と共に駆けて行って兄さんを抱き起こした。

「やばい。心拍が落ちている。」青年が脈を測って言った。

「治療を急がねば死ぬぞ。」

「私がやります。」少女が兄さんに手を押しつけながら言った。

「よし、分かった。俺も手伝おう。」青年は少女の手を取った。

「幻術、《回復の音色》！」

・・・聞き覚えのない術だ。

心地よい鈴の音が響き渡った。

「心拍回復。魔力も戻った。」青年は言った。

「兄さん、兄さん。」僕は声を掛けると、兄さんは細かく身震いした。

だが、起きない。

「ちよつと魔力が足りないのかも知れないわ。寝ればすぐ回復するよ。」

少女は頷いた。その時初めて彼女が碧眼であることを知った。

「ありがとう。僕は忍。君達は？」僕は訊いた。

「俺はミルグラム・グーデル。彼女はラハ・エイラス・ブランイム。」

「よろしくね。忍君。」エイラスはお辞儀をした。

「幻術、《絡繰り糸》。」ミルグラムは術を唱えた。

兄さんの身体が浮かんだ。あ、糸で吊っているのか。

「じゃ、医務室に運んでおくから。」

「申し訳ない。」僕はハーリアさんを背負いながら言った。

僕らは医務室にけが人を運び込んだ。

「俺とエイラスは303号室。遠慮無く来ていいよ。」

ミルグラムは微笑んで言った。何故か、誰かに似ている笑い方だ。
「僕の所は201号室。」僕も部屋番号を教えた。

僕らは談笑しながら、グラランドに戻るとほとんど人がいなくなっていた。

美緒がエイラスと一緒に待っていて事情を教えてくれた。

「先生が想像以上に重傷なので授業は中止になったの。」

「へえ。」僕は思わず声が漏れた。

「暇が出来たからウチらの部屋来てよ。二人とも。」エイラスは面白そうに言った。

「あ、それ名案。」ミルグラムは言った。「是非、来てよ。」

（どうする？私は用事ないし、いいと思うけど。）

美緒がチラッと僕を見て、心の中で言った。

いつの間にかため口になっている・・・まあ、いいけど。

（いいよ。一緒に行こう。）僕は答えた。

「じゃあ、お邪魔します。」

僕と美緒は彼らの部屋に行った。

シオンが早く磨けとかうるさいが、無視しておく。

「さあ、これが俺らの部屋。」

ミルグラムが言って部屋に誘った。

「おお・・・。」僕は思わず感嘆の声を漏らした。

ドドンと織田信長のポスターが貼られている。

「どう？これ、ノブナガ・オダのポスター。秋葉原って所で買った。」

ミルグラムがどうだ、すごいだろ。というオーラを全身で放った。

「うん、すごい格好いい。」意外に美緒がうっとり眺めている。

僕は部屋を見渡してみた。

基本、僕らの部屋と変わらないが、やはり装飾が違う。

ミルグラム側は戦国武将のグッズがたくさんある。

織田信長を始め、豊臣秀吉、毛利元就などなど。

結構な数のポスターだ。

「でも、これしかないんだよね。」ミルグラムは頬を掻きながら言った。

「今度、いくつか上げるよ。」僕は言った。

「え？マジ！？」彼は飛び上がるようにして喜んだ。

「ああ。」僕は笑った。

一方、エイラス側は可愛いピンクのカラーが多い。

ベッドにはピンクの猫の抱き枕。筆記具も桃色のボールペンと言った感じだ。

「あんまり見ないでよ。」エイラスは多少恥ずかしそうに言った。

「え？そうかな。可愛いと思うけど。」僕は思ったことを言った。

「そ、そう？」

「そうよ。」美緒は微笑んだ。

「この猫ちゃんの枕、可愛い。」

「ジャパンの会社の物よ。」エイラスは誇らしげに言った。

女の子達はキャピキャピと話が盛り上がっている。
で……。

（あの……シオン？何でこんな禍々しい邪気を……？）

僕は恐る恐る尋ねた。

（……別に怒ってなんかいませんからね？）

いやいやいや、その怒りを露わにしてあたりはどうなんですか？

（あ、忍君？）突然、第三者の声が混じった。

（え？コウヘイ？）僕は戸惑った。

（うん。）コウヘイは答えた。

（夜、来て貰えるかな？播って子も一緒に。）
そう言うと、彼は部屋番号を告げた。

（あ、オッケ。）僕は答えた。

「忍君。」ミルグラムが突如言った。

「はい？」

「武器は剣だよ。」

「ああ、うん。」何が聞きたいのだろうか？

「実はさ、『絡繰り』に繰り込む武器がなかなか決まらなくてね。剣って良いのかなあ？」

「ん、自分はこの世で一番素晴らしい武器だと思っているよ。」

僕はそう言うのと、でも、と続けた。

「客観的に言わせて貰えば、適度に応用性のある武器を用いた方がいいかも。」

「例えば？」

「短刀とか弓矢。どちらにしろ、武器は複数あった方がいいかも。」

「ありがとう。参考になったよ。」

ミルグラムは満足したように頷いた。

「あ、もう日が暮れちゃった。そろそろ戻る？」美緒は言った。

「ああ、そうだな。」僕は頷いた。

「じゃ、失礼します。」

「ああ、また来てくれな。」

挨拶を交わすと、僕は部屋を出た。

「ふう。」僕は部屋に戻ってベッドに寝転がった。

「明日から平常授業が始まるわ。」美緒は言った。

「冊子を置いておいたから目を通しておいてね。」

「あ、サンキュー。」僕は言った。

シオンが不気味な程静かだ。

んー、これはまずいかなあ・・・。

「美緒、ちょっと席外してくれる？」僕は言った。

「ん、どうして？」

「妻とちよつと直接話したい。」

「あ、うん。」彼女は悟ったようだ。

「じゃ、失礼します。」

美緒が出て行ったのを確認すると、剣の柄頭を捻った。

眩い光を放って、シオンは実体化した。

ぺたんとベッドの上で女の子座りをしている。

「・・・何よ。話したい事って。」シオンはムスツとして言った。

「僕が他の女と一緒にいるのがそんなイヤか？」

「そんな訳ないじゃない。」彼女はぷいっとそっぽを向いた。

「・・・そうか？本当に？」

「本当。」

「本当に？」僕は顔を近づけてみた。

「本当。」

「ホントーに？」

「・・・バカ、分かっているくせに。」シオンは俯いて言った。

「ほら、来いよ。」僕は腕を広げた。

「抱き締めたいなら、自分から来なさい。」

何や、図々しい奴だな。まっ、いいか。

僕は膝立ちで彼女に近づくと抱き締めた。

「温かい・・・。」彼女は呟いた。

「ごめんな・・・。」僕はぎゅっと強く抱き締めた。

そして、僕らは唇を重ね合わせた。

ディープで優しい甘いキスを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7158u/>

僕は魔法使い。だけど留学！？いや、だからなのか？

2011年10月6日23時06分発行